

夢をかたらしに...

ゆうあい

vol.534
50th

2017.12

<http://www.yuai.jp>
office@yuai.jp

12月号 / 平成29年12月1日発行
昭和63年1月18日 第三種郵便物認可



おしまコロニーから ゆうあい へ。

巻頭 50周年記念講演・祝賀会

特集 写真で振り返る50年



発行日 偶数月1日 / 価格1部160円 / 発行者 大場公孝 / 発行所 社会福祉法人侑愛会（北海道北斗市追分7丁目8番9号）



社会福祉法人侑愛会創立65周年
おしまコロニー開設50周年

記念講演・祝賀会

去る十月二十一日(土)、社会福祉法人侑愛会創立六十五周年・おしまコロニー開設五十周年の記念講演及び祝賀会が開催されました。

当日は全国から約三百四十名もの関係者やご来賓の方々にご出席を賜りました。会場につながる通路は祝花で彩られ、華やかな雰囲気につつまれました。

第一部の記念講演では最初に、ダウン症の書家として知られる金沢翔子氏による書道パフォーマンスが行われました(表紙の写真上、左から二番目)。繊細かつ大胆な筆さばきで「共に生きる」と席上揮毫(きこう)していただきました。その後、同じく書家で翔子氏の母親の泰子氏による「ダウン症の娘(こ)と共に生きて」をテーマに記念講演が行われました(表紙の写真上、一番左)。

第二部の祝賀会は、池田千鶴子氏の澄んだ美しい音色のハープ演奏(表紙の写真上、右から二番目)で幕があげました。

その後、地元の北斗市や函館市の両市長をはじめとして、たくさんの方々からお祝いのお言葉や祝電を頂戴しました。開宴して和やかな雰囲気の中、今度は利用者の方たちによる楽器演奏が行われました。ハープは、水上さん、本間さん、林さん、中村さん、ハンドベルは、ハンズベル50音ホッキークワイヤの青木さん、山本さん、八木橋さん、小笠原さん、鈴木さんが壇上で見事な演奏を披露し、祝賀の雰囲気に花を添えてくれました。

あつという間の五時間でしたが、当法人の節目の式典を成功裏に終えることができました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。



色鮮やかな祝花



見事な揮毫「共に生きる」



利用者の方たちのアート作品コーナーも好評でした

お礼のことば

このたびは、たくさんの方にお祝いしていただき心より感謝しております。皆様の多大な応援があり、侑愛会が発展してきたことを感じました。

法人六十五周年、おしまコロニー五十周年記念講演会祝賀会は、大きな節目となりました。創設者大場茂俊が、保育園知的障がい施設、グループホームと展開し、平成九年に法人四十五周年、おしまコロニー三十周年記念祝賀会を行いました。私が、平成十年に理事長を引き継ぎ、二十年が経ちました。五十箇所のグループホーム、福祉就労、相談事業、自閉症支援と利用者第一に進めてきましたが、次の時代に引き継ぎ新しい力を作っていく必要があります。

前年には、福祉セミナー「福祉と医療の連携」、自閉症ワークショップが行われ、記念講演祝賀会のために実行委員会が組織されました。五十周年記念誌『ゆうあい』(軌跡III)編集委員会もできました。それぞれに侑愛会が一致団結して、まとまった動きができたことを何よりもうれしく思っています。



社会福祉法人侑愛会
学校法人ゆうあい学園
理事長 大場公孝

特集

写真でふり返る50年

50th

社会福祉法人侑愛会創立から65年。
渡島当別の地におしま学園が誕生してから50年。
先達の一步から現在につづく軌跡を、
写真とともにふり返ります。

創設者 大場茂俊 (1923.1.19 - 1998.1.19)



大正十二年四月九日、生まれ。

昭和二十八年、上磯町に七重浜保育園を開設。その後、私財を投じて昭和三十八年に社会福祉法人侑愛会を創設、昭和四十二年におしま学園を開設しました。理事長として道なき道を切り拓き、国内でも有数の規模となる総合施設おしまコロニーに発展させました。「二以貫之」を座右の銘にした実践の人であり、一人ひとりを愛する情の厚い人でもありました。平成七年、妻の光(てる)とともに吉川英治文化賞。平成十年四月二十五日死去。七十五歳。空知管内月形村出身。

七重浜保育園の開設

民間の育英事業を継いだ二十四歳の茂俊は、事業の資金繰りのため函館市若松町に油脂工場を創業しました。事業が軌道に乗っ

た三年後、銀行の紹介で上磯町七重浜に五千坪の土地と工場を取得して事業を移転します。広い敷地は、イカ漁の最盛期には加工場や干し場として利用されました。働き手の多くが主婦でしたが、当時の上磯町には保育園がありませんでした。そこで地元住民から大場のもとに保育園開設の強い要望が寄せられ、それを引き受けたのです。

障がいのある子どもや

その家族との出会い

オルガン一台と三名の保母でスタートした保育園ですが、十年後には定員も開設当初の倍となる百名を数えるようになります。園児のなかには知的障がいのある子どもがいました。他の子と同じように受入れながらも、園長室で個別指導をするようになりま

ります。



1964.10 東京オリンピック

1954.9 洞爺丸転覆

1945.8 終戦

構想期

胎動期

前史(はじまり)



昭和38(1963)年
6月

社会福祉法人侑愛会設立
欧州視察旅行

障がいのある子どもとの出会い

昭和28(1953)年
9月

七重浜保育園の開設



昭和22(1947)年
5月

大場茂俊、精華育英会を継承



建設予定地の杭

障がい者福祉の道を進むと決めた大場たちは、海外視察などで見識を広げ、専門的勉強も重ねます。障がい児施設の開設に先立って、社会福祉法人化も果たしました。熟考のすえ、大場たちの描く青写真を可能とするためには、広大な敷地の確保が必要と判断します。最終的にたどり着いた場所は、トラピストの鐘の音が響く渡島当別の土地でした。強い反対運動を受けたり、多額の借金を背負うことにもなりましたが、夢に向かって力強い一歩を踏み出したのです。



おしま学園の誕生

津軽海峡を望む景色の良い丘陵地に、赤い屋根のおしま学園と作業棟が出来ました。奥に見える建物は、建設途中の新生園でしようか。大場理事長たちは、始発駅



としてのコロニー建設を目指します。ここを出発点として、生涯にわたる支えや発達を保障する仕組みを作っていきたい。目指したのは、器づくりではありませんでした。一人ひとりの願いや想いをかたちにしようと描いた青写真は、当時の多くの人たちから夢物語と言われました。

ゆうあいの郷

おしま学園を建てた十萬坪の敷地は「ゆうあいの郷」と名付けられました。厳しくも美しい自然環境のなかで、職員は子どもたちと一緒に畑を耕し、牛を飼い、水を汲み、建物を作りました。障が



いに関する知識や経験があったのは大場理事長一人だけでしたが、職員は子どもたちと一緒に寝起きをして、ともに汗を流すことで、必要なこと、大切なことを彼らから学んでいくこととなりました。



最初の職場実習

ゆうあいの郷が雪に閉ざされた冬、新生園の春先までの作業場面を七重浜の水産会社求めました。通勤や労働はとも厳しいものでしたが、六か月間の実習でリタイアする人はいませんでした。その真面目な態度や姿勢が評価され、会社から数名を雇用したいという話が持ちかけられました。施設運営上の事情もありましたが、最後は本人たちの意向が尊重されました。実習で自信や力をつけた彼らのなかに「施設に戻りたい」という人は一人もいなかったのです。



1973. オイルショック

開拓期

創設定礎期

昭和49(1974)年
12月

昭和46(1971)年
7月

昭和43(1968)年

昭和42(1967)年
10月

学校法人ゆうあい学園設立

はまなす寮開設

新生園開設(1月)
明生園開設(10月)

おしま学園(ゆうあいの郷)開設



明生園





昭和四十六年七月、旧七重浜保育園舎を改装して未認可開設します。施設を出て就職を果たした彼らに、暮らす場所を用意するためでした。社会自立を進めるなかで、施設と地域の狭間で明らかとなる課題が次々とフィードバックされ、その後のおしまコロニーの施設整備や自立体系に大きな影響を与えていくことになりました。「施設から地域へ」という標語がまだ馴染みのない時代、はまなす寮の実践は先駆的なものとして注目を集めました。多くの結婚家庭も誕生します。

はまなす寮(通勤寮)

早期療育、地域療育



昭和五十年、おしまコロニーは本格的に母子訓練事業に取り組み始めます。おしま学園で低年齢児を受入れるなかで、より早期からの療育、家族へのサポートの必要性を感じてのものです。母子訓練では、子どもや母親と一緒に支援者も宿泊して個別相談や研修、小集団療育、親子レクなどを行いました。その後、つくしんぼ学級の開設など順次早期療育体系が整えられ、



フィールドは施設から地域に広がります。昭和六十年には、おしま地域療育センターも開設しました。

教育

おしま学園開設と同時に、学齢期の子どもたちへの教育機会の保障・仕組みづくりに奔走します。おしまコロニー創設の目的の一つが、障がい児の教育を受ける権利の獲得を目指したものであったため、並々ならぬ強い思い入れがありました。父母とともに何度も上磯町(現北斗市)と話し合いを重ね、おしま学園開設から半年後に、公立の特殊学級がゆうあいの郷敷地内に開設されました。その後、高等部を法人(民間)で開設、昭和四十九年に学校法人を創立することになります。



TEACCHプログラムの出会い
増えつつける自閉症児への適切な支援を模索するなか、以前より交流のあった佐々木正美氏を通じて、TEACCHプログラムに出会うこととなります。昭和六十一年

高齢期



のことでした。この出会いは、おしまコロニーの自閉症支援における大きなターニングポイントとなりました。さっそく、そのアイディアを取り入れようとアメリカのノースカロライナ州立大学に幾度となく職員を派遣します。大場理事長自身も自分の目で確かめ、学ぼうと現地を訪れています。

昭和五十年、侑愛荘を開設します。知的障がいのある高齢者を対象とした専門施設は、当時全国的に見ても例が少なく珍しいものでした。しかし、障がいのある方たちの一生を支える体制づく

1981. 国際障害者年「完全参加と平等」

1979.4 養護学校義務化

進展期

派生(専門化)期

昭和50年代後半

昭和53(1978)年

昭和51(1976)年
10月

昭和50(1975)年

TEACCHプログラムが紹介される

ゆうあい養護学校高等部開校(4月)
第二おしま学園開設(5月)

函館青年寮(通所部併設)開設(1月)
母子訓練センター完成(2月)
ゆうあい幼稚園開校(4月)
つくしんぼ学級開設(8月)

侑愛荘開設



函館青年寮



後、通所施設として独立したり分場になったりと、時々必要とされる姿に変わっていききました。写真のだいさんは、後に北海道で初めての福祉工場（おしま屋）となりました。大型スーパーにテナント出店した店舗（ゆうあいプラザ）は、おしまコロニーのアンテナショップ的存在になります。



生活寮、グループホーム

グループホームが制度化されたのは平成元年のことですが、おしまコロニーではその前から、共同作業所などでの収入と障害基礎年金をもとにして、北海道単独事業である生活寮制度を活用して地域生活を可能にしています。平成四年には、全国で初めて

作業所

りを目指したおしまコロニーにとって、人生の締めくくりをいかに支えるかというテーマは大きなもので、その開設は必然ともいええました。現在（平成二十九年）、平均年齢は七十二歳となりました（開設時四十六歳）。一人ひとりとしての終の棲家を目指した取り組みがつけられています。

昭和六十一年、立て続けに三か所の小規模作業所を設置します。働く（福祉的就労場所が、地域に広く必要とされる時代となっていたのです。それらは、おしま共同作業所と呼ばれました。その



の取り組みとなる公営住宅を利用したいしべつ荘を開設します。こうして、一般の職場で働くことが難しい方たちであっても、街の中で暮らすことが出来る仕組みが少しずつ整えられていくこととなりました。



機能共同体

障がいのある方たちの生涯を支えようと描いた青写真は、開設三十年を迎えるころには、ほぼ現実の姿になっていました。一人ひとり違った人生を支えるために、さまざまな事業の展開や取り組みを更新してきた結果でした。特色ある事業の一つひとつは自己完結することなく、一人の利用者を中心として柔軟に組み合わせられ、密接な連携をすることとなります。この「機能共同体」という考え方は、おしまコロニーの生涯教育思想を体現する一つの回答といえたでしょう。



1995.1 阪神淡路大震災

1991. バブル経済の崩壊

拡充(体系化)期

平成9(1997)年
10月

平成6(1994)年
10月

平成3(1991)年
10月

昭和63(1988)年

昭和61(1986)年
3か所の小規模作業所設置

昭和60(1985)年
4月

第1回福祉セミナー開催

エリック・ショブラー博士来訪
特別セミナー開催

星が丘寮開設

おしま地域療育センター（診療所併設）開設

おしまコロニー開設30周年
記念事業実施



第二代理事長 大場公孝（1953）



ひたすら磨く歩みだったといえるかもしれません。多様化する障がい特性やニーズに応じた支援を可能とするような知識や技術の習得のために、各種セミナーやコンサルテーションの実施、国内外研修への派遣、研究論文の表彰などを行い、学びつづけることのできる環境や人材育成のためのプログラムの充実に努めてきています。

昭和三十年三月十日、生まれ。

医大卒業後は大学病院の医局（精神神経科ほか）に入局。昭和六十三年、社会福祉法人侑愛会に入職、ゆうあい会石川診療所の所長となります。その後、第二おしま学園の園長やおしま地域療育センターの所長などを歴任、平成十年に社会福祉法人侑愛会、学校法人ゆうあい学園の理事長に就任します。法人の思想や精神を伝承しつつ、変わる時代や社会ニーズに合った相応しい姿を模索、更新しつづけています。

人材育成と専門性の向上

福祉は人なり。開設から現在まで五十年、その半世紀を数える歩みの後半はハードからソフトへと重心をうつし、支援の専門性を

TEACCH2デイ基礎講座in函館

社会福祉法人侑愛会（おしまコロニー）・自閉症協会北海道支部道南分会



法人理念に込める想い

「利用する方々から学び、一人一人が必要としているサポートを考え、実行する」。平成二十三年に掲げられた法人理念は、開設当時から脈々と受け継がれてきた「利用者ファースト」「多様性の尊



重」などの精神を謳っています。日中活動については、画一的なものではなく、その人らしさが発揮されるような多様な活動のあり方が模索され、暮らしの場面についても、一人ひとり違ったスタイルに応じて安心して暮らすことのできる「住まう場」づくりが目指されています。

相談事業の充実と

地域共生に向けて

平成十一年の障害者生活支援センターぱすてるの開設を皮切りに、さまざまな相談支援事業が展開されていくようになります。

いち早く母子訓練など独自の在宅（地域）支援に取り組み、そこで培われた専門性やノウハウが、施設を利用する方のニーズのみならず、増える在宅（地域）ニーズへの対応にさらに必要とされる時

代となっていたのです。「ともに生き、ともに成長していきたい」。ゆうあいはこれからも求められる姿形に変容させながら歩みを重ねていくことでしょう。



5 ページにわたってご紹介したこれらの写真や文章は、巻頭記事の記念講演・祝賀会で展示した写真パネルより抜粋したものです。

五十年もの歩みをかさねることが出来たのも、多くの方たちとの出会いや支えがあったからこそと感謝申し上げます。これからの「ゆうあい」もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2016.7 津久井やまゆり園事件

2011.3 東日本大震災

2000. 社会福祉基礎構造改革

1997. 少子高齢社会に本格突入

変容更新期

福祉転換期

平成24(2012)年
4月

平成20(2008)年
4月

平成13(2001)年
4月

平成11(1999)年
10月

平成10(1998)年
4月

あおいそら開設

ぱすてる開設

第1期法人運営・経営3か年計画策定

開設50周年、ゆうあいへ
記念事業実施

大場公孝、第二理事長就任
大場茂俊逝去



